

オーデンのバラッド

長 江 芳 夫

Auden's Ballads

Yoshio NAGAE

W. H. Auden の代表的なバラッド “O What is that Sound” (「おお、あの音は何」) (1932) と, “As I walked out one Evening” (「ある夕べ散歩に出て」) (1937) を読み, その詩想の流れを辿り, 単純素朴で軽快な歌謡の調べの奥に, 地鳴りのように低く響いている, 重く厳しい「誠実」の問題, 「時」と「永遠」, 「生」と「死」の想いについて考える。

“O What is that Sound” (「おお、あの音は何」)

O what is that sound which so thrills the ear
Down in the valley drumming, drumming?
Only the scarlet soldiers, dear,
The soldiers coming.

おお、下の谷でドンドン、ドンドンと
耳に震えるあの音は何でしょうか？
深紅の色の兵隊さんたちなのだよ、おまえ、
兵隊さんたちがやってくる音なのさ。

物語はいきなり核心に入る。恋人同士と思われる男女の対話。二人の方に近づいてくる軍隊。事情を知らない女は不安になり、男に問いただす。か弱い存在としての自分の、不可知の暴力に対する、実存的な恐怖心が語られる。それに答える男の、澄ましきった、冷やかで、不誠実とも見える態度は、暗示に充ちて多義的である。

各連は——最終連を除き——前半2行が女の問いで、後半2行は男の答えである。

O what is that light I see flashing so clear
Over the distance brightly, brightly?
Only the sun on their weapons, dear,
As they step lightly.

長江芳夫

おお、遠くでピカピカ、ピカピカと
あんなに閃くあの光は何でしょうか？
武器に陽が当たっているのだよ、おまえ、
兵隊さんたちが軽やかに進んでくるのさ。

女の眼には見えず、ただ耳に響く音としてのみ感じられていたものが、今や視覚に迫ってくる。男は、女を安心させようとして、韜晦の煙のなかに隠れようとする。時は待たない。場面は劇的に展開してゆく。

O what are they doing with all that gear,
What are they doing this morning, this morning?
Only their usual manoeuvres, dear,
Or perhaps a warning.

おお、あんな武器をどうするのですか、
どうするのですか、今朝、今朝？
いつもの演習なのさ、おまえ、
それとも警告なのだよ。

兵士たちの武具の動きが手に取るように見える。女の気掛かりは高まる。男は言い繕って宥め賺そうと努める。

O why have they left the road down there,
Why are they suddenly wheeling, wheeling?
Perhaps a change in their orders, dear.
Why are you kneeling?

おお、どうしてそこで道をそれたのですか、
どうして急に旋回するのですか、グルグル、グルグルと？
たぶん命令が変わったのだよ、おまえ、
どうしておまえは跪くのさ？

兵士たちは突然方向転換をする。女の疑心が募る。問い詰められた男は、苦し紛れか、逃げ口上気味になって尋ねる。女は跪いて祈り始めていたのである。恐怖におののき、自制心を失くして。

O haven't they stopped for the doctor's care,
Haven't they reined their horses, their horses?
Why, they are none of them wounded, dear,
None of these forces.

オーデンのバラッド

おお、お医者さんの手当を受けに停ったのではないですか、
止めたのではないですか、馬を、馬を？
いや、誰も負傷していないのだよ、おまえ、
あの兵隊たちは誰も。

事態はもはや隠しようがなくなるが、男は尚も女の質問を何とかしてはぐらかそうとする。戦闘のために怪我人が出たのではないか？ 医者が必要なのではないか？

O is it the parson they want, with white hair,
Is it the parson, is it, is it?
No, they are passing his gateway, dear,
Without a visit.

おお、牧師さんが必要なのですね、白髪の、
牧師さんが、そうでしょ、そうでしょ？
いや、その門前は通りすぎているのだよ、おまえ、
訪ねることなしにさ。

女は、医者の手当の甲斐もなく亡くなったかもしれない人への哀悼の気持を懐く。その想像力あるいは空想は、死に伴う宗教儀式にまで及ぶ。しかしその心配は杞憂であったのだろうか？

O it must be the farmer who lives so near.
It must be the farmer so cunning, so cunning?
They have passed the farmyard already, dear,
And now they are running.

おお、近くに住んでいる農家の人でしょう、
農家の人、あのずるい、ずるい？
もうその前庭は通り過ぎたのだよ、おまえ、
いまは走っているのさ。

軍隊の^{めあて}目当は、女の近所に住む悪徳農家かと思いきや、それも^{かたす}肩透かしを^く食わされる。さて、それからである。女の^{きゅうそ}窮鼠にも似た立場の思いに対して、男の、これまた^{せつぱ}切羽詰った心境。

O where are you going? Stay with me here!
Were the vows you swore deceiving, deceiving?
No, I promised to love you, dear,
But I must be leaving.

おお、どこへおいでになるのですか？ここに私といて下さいな！
あなたのなざった誓いは嘘でしたの、嘘でしたの？
いや、ぼくはおまえを愛すると誓ったのだよ、おまえ、
でも、行かなければならないのさ。

兵士たちは今や目前に迫る。絶体絶命か？生命の危機か？^{かんいっばつ}間一髪の瞬間である。さあ、どうなるか。恋人同士のあいだには、相互に認識の落差が介在する。自己の心変りに対する男の苦し紛れの言い訳は、もはや何の役にも立たない。男はついに——それともやはり——女を裏切るのか？「誠実」は果してどちらの側にあるのか？二律背反の状態は、いまや、^{はたん}破綻しようとしている。テンポが更に速まる。

O it's broken the lock and splintered the door,
O it's the gate where they're turning, turning;
Their boots are heavy on the floor
And their eyes are burning.

おお、錠前をこわし、ドアを砕いたわ、
おお、門のところで廻ってきます、廻ってきます。
軍靴は床に重くとどろき、
眼はガラガラと燃えている。

兵士たちは、女の家を打ち砕き、軍靴でドカドカと床に踏み込み、恐怖はクライマックスに達した。男はどうしたか？逃げたのか？それとも何か他の手段にうったえたのか？一体男は誠実人間なりや否や？

第一連から第八連までは、それぞれ前半2行の女の問題に、後半2行で男が答えるという形式であった。また、男の答えの第1行の終りには、'dear'（「おまえ」）という、女に対する親愛の呼びかけの言葉があった。しかしこの第九連（＝最終連）は、4行すべてが女の独語あるいは独白に終わっている。そして'dear'の言葉も消えている。

男は、女の不安を言葉巧みにはぐらかして、三十六計逃ぐるに如かずとばかり、その場限りの最上策を採ったのであろうか。そうかもしれない。だが、そうではあるまい。彼にあって、女への愛は変ってしまい。他方、女は、男に裏切られたという気持——少なくとも不可解な想い——を払拭できない。愛しあっている男女にとって、互いの信頼ほど大切なものはないはずなのに。では、男の行動の背後にあるものは何か。愛よりも大切なものがあつたのであろうか？

真相は？——それは解らない。ただ解釈があるのみである。「男の裏切り」かもしれない。男はレジスタンスの大義に命を捧げる「誠実な非服従者」('an honest rebel')¹⁾なのかもしれない。第二次世界大戦勃発への予兆の萌芽もぎざしている。この平和な？世界では、戦争を初めとする、理不尽な国家的人為的暴力が人びとの倅せを破壊する例に事欠かない。社会的政治的暴力としての諸悪も、非力の弱者たちの間ではほとんど日常茶飯事と化している。人間個人の基本的権利は、国家権力の前では、所詮は蟻螂の斧に過ぎないのか？

“Leap Before You Look”（「見るまえに跳べ」）（1941）のなかの句，‘the sense of danger’（「危険の感覚」），‘you will have to leap’（「あなたは跳ばなければならない」），‘A solitude ten thousand fathoms deep’（「1万尋の深さの孤独」）等は，これらの問題を考える一つの手掛かりになるかもしれない。しかし，ロマンティシストとリアリスト，個人と社会といった割り切り方では解決できないものが残る。男はこのあとどうするつもりなのか？ その行為は正当化できるのか？ また，恐怖のただなかに一人取り残された女の運命はどうなるのであろうか？ 現代人はこのように切実な irony あるいは paradox を生きているのであろうか？ 読後にいつまでも考えさせられることがらである。

“As I walked out one Evening”（「ある夕べ散歩に出て」）

As I walked out one evening,
Walking down Bristol Street,
The crowds upon the pavement
Were fields of harvest wheat.

And down by the brimming river
I heard a lover sing
Under an arch of the railway:

ある夕べ散歩に出て
ブリストル通りを歩いて行くと、
舗道の人びとの群は
収穫期の麦畑だった。

あふ
溢れる河のほとりでは
鉄橋のアーチの下で
恋する男が歌っていた。

イングランド南西部の、エイヴオン河口の港市ブリストル。永遠の恋を信じて疑わず、恋人に愛を誓う、純愛一筋の若い男を諭し窘める、市中の時計たちの垂れる、説教調の思慮分別が、快いヒューマーとペイソスとアイロニーを湛えて示唆に富んでいる。

Audenはこの詩を a ‘pastiche of folksong’（一種の模倣民謡・振り歌）と呼んだ²⁾。この詩の第一連は、Auden 編 *The Oxford Book of Light Verse* (1938) のなかの “The Sailor’s Return” の第一連

As I walked out one night, it being dark all over,
The moon did show no light I could discover,
Down by a river side where ships were sailing,
A lonely maid I spied, weeping and bewailing.

長 江 芳 夫

ある晩散歩に出ると、あたり一面は暗く、
月の光では何も見えなかった、
船が航行する河べりでは、
ひとりぼっちの少女が涙を流して悲しんでいた。

の影響を受けている。物語の場面の状況設定である。

'Love has no ending.

'I'll love you, dear, I'll love you
Till China and Africa meet,
And the river jumps over the mountain
And the salmon sing in the street,

'I'll love you till the ocean
Is folded and hung up to dry
And the seven stars go squawking
Like geese about the sky.

The years shall run like rabbits,
For in my arms I hold
The Flower of the Ages,
And the first love of the world.'

「恋に終りはないのだ。

「ぼくはきみを愛するよ、ねえきみ、
中国とアフリカがくつつく時まで、
川が山を跳び越えて
鮭が通りで歌う時までも。

「ぼくはきみを愛する、大洋が
畳まれて吊るされて干上がり
七つ星が鷺鳥のようにガアガア
空を歩きまわる時までも。

歳月は兎のように走ればいいさ、
ぼくは両腕に抱きしめているのだ
時代の花形を、
世界一の恋人を。」

オーデンのバラッド

第二連 4 行から第五連 4 行までは、恋する男の言葉である。その言い分、言い回しは、
当人がひたむきなるがゆえに、第三者には滑稽に見え、大げさな誇張 (hyperbole) と思わ
れるかもしれないことには気付かない。甘い夢に浸っている男にとって時は止まっている。
言わば無意識過剰である。しかも相手の女の反応は語られない。第三・四連の背後には、
Andrew Marvell の “To His Coy Mistress” の模倣³⁾がある³⁾。

I would

Love you ten years before the Flood,
And you should, if you please, refuse
Till the conversion of the Jews.

ぼくは

ノアの洪水の10年前からきみを愛しよう、
きみは、お望みなら、ユダヤ人の
改宗の時まで拒みつづけたらよいでしょう。

But all the clocks in the city
Began to whirr and chime:

しかし市中の時計が一斉に
ボンボンと鳴り始めた。

第六連 3 行から第十四連 4 行までが、この男の熱した頭^{ねっ}に水をかけようとする時計たち
の言葉である。時計はこの詩の寓意の立役者である。

‘O let not Time deceive you,
You cannot conquer Time.

‘In the burrows of the Nightmare
Where Justice naked is,
Time watches from the shadow
And coughs when you would kiss.

‘In headaches and in worry
Vaguely life leaks away,
And Time will have his fancy
To-morrow or to-day.

‘Into many a green valley
Drifts the appalling snow;

Time breaks the threaded dances
And the diver's brilliant bow.

'O plunge your hands in water,
Plunge them in up to the wrist;
Stare, stare in the basin
And wonder what you've missed.

「おお、時に騙されてはいけないよ、
時を征服することはできないのだ。

「正義の女神が裸で潜んでいる
夢魔の隠れ場では、
時の神が物陰から見張っていて
おまえがキスをしようとするとき咳払いをする。

「頭痛や悩みごとでうっかりしているうちに
生命は漏れてなくなって行くのだ。
そして時の神はそのお気に入りをもぎ取って行こうとする
明日にも今日にも。

「多くの緑の谷間へと
恐ろしい雪が吹き積もる。
時は数珠つなぎの舞踊や
ダイバーの輝く曲線を打ちこわす。

「おお、おまえの両手を水盤に浸してごらん、
手首まで浸すんだ。
じっとじっと見るんだ水盤を
そして自分は何を失ったのかを考えたまえ。

「刹那の感情に捉われて、不変の真実の姿を見失うなよ。」時計たちは人生の先達としての教訓を語る。Marvell 謂う所の「時の翼ある戦車」(‘Time’s winged chariot’) は背後に近づき、前方には「広大な永遠の沙漠」(‘Deserts of vast eternity’) が広がっているのだ。

第八連3・4行の「時の神」(‘Time’) は「死神」(‘Death’) でもある。明日を信じて生きているわれらの命は、永遠どころか、蜉蝣のように「一日の命」(‘ephemeral’) に過ぎない。(Cf. “Lullaby”)。わが在原業平も詠じている。(『伊勢物語』)

つひにゆく 道とはかねて ききしかど
きのふけふとは 思はざりしを

人の命は砂時計の砂だ。緑あふれる夏の谷間にも降雪の冬が迫る。華麗な踊り子たちの群舞の列にも、跳び込み選手の描く弓形の美しい曲線にも、その他何にでも、時の破壊力はついてまわるのだ。Memento mori. (死を思え)。

第十連は読者を考え込ませることであろう。水盤に両手をつけている間に失ったものとは何だろうか。何か水と関係のあるものなのか？ あれか？ これか？ ——正解は「時」である。1秒、1分といえども、刻刻に時は消え行き、生きているものは死に近づくのだ。その点では10年、100年とどれほどの^{けいだい}径庭があるだろうか？

'The glacier knocks in the cupboard,
The desert sighs in the bed,
And the crack in the tea-cup opens
A lane to the land of the dead.

'Where the beggars raffle the banknotes
And the Giant is enchanting to Jack,
And the Lily-white Boy is a Roarer,
And Jill goes down on her back.

'O look, look in the mirror,
O look in your distress;
Life remains a blessing
Although you cannot bless.

'O stand, stand at the window
As the tears scald and start;
You shall love your crooked neighbour
With your crooked heart.'

「氷河が食器棚のなかでノックをし、
沙漠がベッドで溜息をつく、
そして茶碗のひび割れは
死者たちの国への小道を開くのだ。

「そこでは乞食たちが札束を^{とみくじ}富籤販売し
巨人がジャックに魅力があり、
白百合少年は吠える獣と化し、
ジルは^{あおむ}仰向けに倒れる。

「おお、鏡のなかを見給え、見給え
おまえの悩みのなかを。

人生はやっぱり祝福なのだ
たとえ祝福できないとしても。

「おお、立ち給え、立ち給え、窓のところに、
涙が頬を焼いて溢れ出すとき、
おまえの曲った心で
おまえの曲った隣人を愛するのだよ。」

時計たちの語る言葉はその後半部に移る。第十一・十二連は、現実にはあり得ない、非現実の世界の登場である。食器棚のなかで氷河がノックするなどということがあるのか？ 愛のベッドで沙漠が溜息をつくなどということがあるのか？ 茶碗の貫乳を辿って行けば死者の国に行き着くなどとは！ ——だが待ち給え。それらは果して絶無のことと言いつけることができるのであろうか。コップのなかの南極の氷、不毛の愛、自動車事故、航空機事故、病氣、戦争、地震等等。それらは天外の奇想 (conceit) ではない。むしろそれこそが現代文明社会の姿に他ならないのだ。日常と非日常とは表裏一体のものなのである。「自然」とは、もともと「万一の事の発生すること」(『広辞苑』)でもあった。まさかの事態、一見無縁と思われるものが、——死が——どっこい、己が足下にあるのである。

死者たちの国にあっては、この世の常識に反して、乞食たちがお札の当たる宝籤を売っているし、童話“Jack the Giant-Killer”の巨人はジャックと仲好しであり、“Green Grow the Rushes O”の白百合少年は強者であり、また“Jack and Jill”のジルは仰向けに倒れるのだ。

であればこそ、おまえはよくよく、鏡のなかの自己の姿に見入るがよい。そして己が苦悩を見詰めるのだ。生きることは辛い。この世に生まれてよかったのかと自問することもあろう。しかし、生きることは、たとえどんなに苦しくとも、「祝福すべきこと」(‘a blessing’)なのだ。

窓辺に立てば、涙が頬を焼いて流れる。どんなに邪悪な隣人であっても、おまえはその人を愛さなければならない。“Thou shalt love thy neighbour as thyself.” (Matthew XIX-19)。「曲った心」(‘crooked heart’)で？ ——そうだ。おまえ自らの心は歪んでいないだろうか？ 不正直ではないだろうか？ 他人事ではないのだ。自分の胸に手を当てて、よくよく考えてみよ。日常生活の身口意を。知らず識らずのうちに「悪」を犯してはいないかを。

It was late, late in the evening,
The lovers they were gone;
The clocks had ceased their chiming,
And the deep river ran on.

夜は更けていた、すっかり更けていた、
恋人たちはもういなかった。
時計もすでに鳴りやんでいた、
そして深い河は流れつづけていた。

時計たちの八連半にわたる訓戒は終り、物語はまた元の場面に戻る。恋人たちは聴いていたのだろうか？ そして熱した思いを冷ましたのだろうか？ すべての時計の鳴り終わったあとには、深い夜のしじまだけがあつた。そしてあの夕暮の情景と同じく、「溢れる河」(‘the brimming river’) が流れているのであつた。河の流れはそのまま時の流れを象徴する。恋する男にとって止まったと思われたあの「時」は、現実のエイヴオン河にあつては、止まりはしなかつた。曾てわれわれにとって「未来」であつた日々が、やがて「現在」となり、つづいて「過去」となる。そのようにして「時」は過ぎて行くのだと、われわれは思っているけれども、そうではない、過ぎて行くのは「時」ではなくて「われわれ」自身の方なのである。

註

- 1) John Fuller, *W. H. Auden: A Commentary* (Faber and Faber, 1998), p. 153.
- 2) M. K. Spears, *The Poetry of W. H. Auden* (Oxford U. P., 1963), p. 110.
- 3) Cf. 中国漢代歌謡「上邪」

上邪
我欲與君相知
長命無絕衰
山無陵
江水為竭
冬雷震震
夏雨雪
天地合
乃敢與君絕

上や
我君と相知り
長命に絶え衰うこと無からんと欲す
山に陵なく
江水竭くるを為し
冬雷震震として
夏に雪雨り
天地合して
乃ち敢て君と絶たん

(ただ、この歌の「我」は女であり、「君」はその恋人の男である)